不定期刊行　　第482号　2013.03.21

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

雪上生活技術と冬山縦走合宿

3月16日、17日に県ヶ丘と池工の合同合宿を前常念山脈とでも呼びうる金松寺山、天狗岩、黒沢山、なめし穴山で行った。松本市梓川地籍の金松寺から入山し、安曇野市三郷北小倉地籍までおよそ15ｋｍ。金松寺山と天狗岩、黒沢山へのピストン登山はこれまでに経験があったが、ここを縦走でつなぐというのは私にとっても初めてのコースであった。里山ゆえ、夏はとても行く気にはならないが雪のある時期なら楽しそうだと、元々は信高山岳会の例会山行として企画したものだ。しかし、集まったのは松田、重田、大西の3人だけだった。これまでの経験から相当のラッセルが予想されたので、ロートル3人では厳しいと、松田さんから、「ラッセル要員として県ヶ丘の生徒を連れて行きたいが池工も一緒にいかが」と持ち掛けられたことから、合同合宿登山に発展した。

ここ数日の暖かさで雪融けが一気に進んでいたため、予想したほどにラッセルはない上、意外と稜線上は広くそれほど藪にも苦しめられなかったので、生徒に読図やラッセルも経験させながらの楽しい登山になった。極めてマイナーな山なので、入る人もあるまいと思っていたが、豈にはからんや、逆コースを黒沢山まで入っていた人のトレースがあったのにはびっくりした。

金松寺から林道を入り、駐車スペースに車を停め、7:50に出発する。林道をおよそ40分で林道の終点である。ここで一本取りスパッツを装着した。高校生は県ヶ丘を今年卒業した塩谷君をアドバイザーに先に行かせ、大人4人（松田、藤田、大西、重田）はあとからゆっくり進んでいくことにした。ところが先行する若者たちの辞書には疲れという言葉がないらしい。ここから金松寺山まで、1時間半休まず歩き続けて、10:40に山頂に到着。夏なら1ピッチだが、雪があるのでおよそ2ピッチ分のアルバイト、フル装備の雪の山でこの1ピッチはさすがに堪えた。しかし、雪は少なくまだ腐っていないので、つぼ足でもまだ問題ない。一休みした後、生徒には「冬山では40分くらいで一本とれ」と言い聞かせた上で、先に歩かせ、天狗岩を目指した。天狗岩についたのは 12:40。この稜線上唯一穂高が展望できるロケーション。今日は天気もよく、乗鞍と御嶽も白く輝いて見える。しかし、松本平は大風が吹いているらしく「松本平の黄砂」ともいえる山形村、塩尻市岩垂原の土埃の舞い上がるさまがよく見えた。ここからはアップダウンを繰り返しながら黒沢山を目指す。北斜面になるので、ワカンを装着した。途中2000m弱のピークを3つ越え、今回の主峰黒沢山（2051m）の登りにかかる。時々氷化したり、雪が途切れたりした歩きにくい急登にスノーシューの松田さんが苦戦していた。頂上に着いたのは、15:25。3年前に松田さんと2人でこの山には東尾根から登ったことがあるが、その時よりはだいぶ雪が多かった。予定よりだいぶ時間がかかっているが、明日の行程を考えると少しでも先に進んでおきたい。重田さんと藤田さんはややバテ気味なので、ゆっくり来てもらうことにし、生徒たちと松田、大西が先行する。黒沢山の北斜面はやや尾根が狭く、樹林も混んでいたが、さらに北方の1956mのピークの先のコルまで進むと格好のテン場があった。木の間隠れに三郷の室山が遠望できる。

そのロケーションの良いところにテントを張ろうと整地をはじめた。その時松田さんが「あまり、端によると物を落とすよ」と言った。その一言はまるでその後の出来事を予言したかのような一言だった。広いコル、まあ大丈夫と高を括って整地し終わったところにテントを広げた時、急に風が出てきた。テントの上にポールを広げ、一本を通し始め、もう一本を伸ばしてちょっとテントの上に置いて先のポールを通そうと手を離した刹那のことだった。スーッとポールが動き出すのが見えた。「あっ」S君と同時に声を上げたのは同時だった。手で掴もうとしたときにはすでにポールはフォールラインに向かって流れ出し、手の届かないところまで滑っていた。どうせ撥ねてその辺にひっかかっているだろうと思って下の谷を覗き込んだが、ポールは疎林の沢を滑り落ち、影も形も見えない。谷を標高差で 250mほど下って捜索をしたが、結局見つからず仕舞い。辺りには夜陰が迫ってきている。池工は急な山行計画のため参加者は生徒 1 人に顧問が 2 人の計 3 人。持参したエスパースの 3 人用テントは、ポール 1 本ではどうにもならない。ここは無理してテントの頂点にポールを立ててエスパースを張るか、雪洞を掘るか、ツェルトを張るか、安直に県ヶ丘のテントに潜り込ませてもらうか・・・。

もう少し早い時間だったらおそらく雪洞を掘っただろうが、今回の僕の選択はツェルトビバークであった。その理由は、時間的にロスなく張れることと、それなりにきちんとした居住空間を得られること、張るための道具もあったこと、天候の崩れがなさそうだったことなどがその理由である。そこで、生徒にはそう宣言して、持っていたカラビナ、ロープ、スリングを活用してツェルトを張った。僕としては、この時期のツェルトビバークにそれほど悲愴感はなかったものの、つとめて陽気にふるまっていた僕以外の 2 人にとっては、初めての雪山でのツェルトビバークは不安な一夜であったに違いない。予想通り夜の天気も悪化せず、結果はオーライであったが、それにしても、お粗末な顛末であった。ちょっとした不注意が、もたらした大きな代償。逆に言えば、ちょっとした注意をしさえすればなんのことはなかったのだ。今回は自分自身にとっても肝に銘じる一夜となった。そして、もう一つ知ったことは、どんなときにも指導者が動じないこと、ロープと最低限のカラビナやスリングを持っているということの意味だった。

手前 池工のツェルト

翌日も天気は最高、8:00 にテン場を出発。途中では読図をしながら、8:45 分には「ますがた」という地名札のかかった 1940m のピーク、9:15 には「カネウチ」という 1887m のピークに到達。このあたりからは三郷で生まれ育った松田さんの庭ともいうべき領域。10:00 にはなめし穴山（1382m）に着いた。展望もよく、昨日来辿ってきた稜線をすべて望むことができた。縦走していつも思うのは、人間の足の偉大さである。東向きの急斜面で雪も緩んできたので、ここからはワカンを脱いで一気に下った。雪が途切れたあたりからは、昔の木馬道を、勝手知ったる松田さんの引いた線の通りに辿り、13:00 には無事北小倉に下山した。

なめし穴山にて